

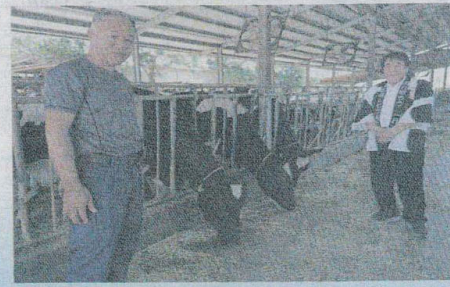
# 県産牛乳を飲もう! 牛乳も地産地消!!



国際規格SQFを取得し安全安心な生産管理を行うやまぐち県酪乳業の工場



山口県酪乳業協会の原田康典会長(左)と松永道幸副会長も県産牛乳の消費拡大に熱心する



2000年の第39回農林水産祭(畜産部門)で天皇杯を受賞した下関市豊北町の佐々木誠雄さん(左)の牧場で情報交換する松永道幸副会長

下関市菊川町のやまぐち県酪乳業 河口浩己社長は、酪農家たちがつづけた会社。前身の下関酪農協同組合から約75年の歴史がある。現在は県内最大級の乳業メーカーとして、小中学校給食に提供する牛乳は県内のほぼ全域を担当。県外企業からの信頼も高く、牛乳の他、そよ風ヨーグルトなどの

6月は牛乳月間。牛乳に対する関心を高め、酪農や乳業の仕事を知ってもらうことを目的に、国連食糧農業機関(FAO)が2001年に6月1日の世界牛乳の日と同月間を制定。日本では7年に1度日本酪乳業協会(一般社団法人ミルク)が6月を牛乳月間と定めた。県内でも牛乳月間に合わせて、生産者たちが「県産牛乳を飲もう」と地元産の牛乳や乳製品の消費拡大を呼びかけている。牛乳は栄養密度の高いバランス食品。牛乳から搾った生乳を加熱殺菌し、添加物などは加えない自然の恵み。その裏側には、暑さに弱い牛のために牛舎の温度管理や健康管理に励むなど、酪農家が日々汗を流している。県内酪農家の思いや、酪農家と消費者の橋渡し役をしている乳業メーカーの取り組みを。

## 牛乳の消費拡大へ



やまぐち県酪乳業株式会社 代表取締役社長 河口 浩己氏

「やまぐちブランド」に登録。これを原料としたソフトクリームなどは県内の道の駅などでも販売し、地域のイメージアップを図っている。同市菊川体育館のネーミングライツパートナーにもなり、「菊川ベルちゃん体育館」と命名。市内の大型イベントのしものせき海峽まつりやツールド・しものせき、下関海響マラソンなどにも協力して地域をPR。年間約2千人の工場見学受け入れなど地域とのつながりを大切にしている。

2023年度の国内生乳生産量は732万トン。うち北海道産が417万トンを占め、他の都府県に流入。北海道外の酪農家の経営を圧迫している。

県内の酪農家は全国でもみ続けてほしい。県産牛乳は少敷。しかし、健康にもなる完全栄養食品の牛乳を

ただけなら」と牛乳の地産地消を呼びかける。県酪乳業協会の原田康典会長は、県内の酪農家たちの苦勞を代弁。まず課題となつているのが適正価格での販売だという。「消費者がらすれば安い方がいいが、飼料や燃料代などが高騰している。系統外生乳を扱うメーカーが北海道の生乳な どを使って安く販売すれば、県内産はダメージを受ける。これが大きな問題になってい る」と指摘する。

同協会の松永道幸副会長は県内酪農家と密に情報交換し、よき相談役となつてい る。県内酪農家から漏れ聞 こえるのは「飼料代の高騰 と用地転用の問題」だとい う。高齢化に加えて赤字続 きで廃業を検討しても、農 地法の壁で転用が難しいのが現状。「法的な見直しを 求められるが、なかなか改善 の兆しが見えない。県民の皆 さんには県産牛乳をこ愛飲 いただき、少しでも県内の酪 農家の助けになるようにこ 理解を協力をたまわれれば」と話す。

「県産牛乳を飲もう! 牛乳も地産地消!!」を私たちが応援しています

